

## フォーラム

### リオ史料集を読みながら、リオ五輪の成功を祈る

岸和田 仁（日本ブラジル中央協会常務理事）

ジャンクフードと揶揄され、世界が米国流にフラット化している悪しき例として語られるマクドナルド。このハンバーガーチェーンは、ブラジルでもすでに普通名詞化しており、現時点で800店舗以上が192の都市に広がっている。たとえば、ノルデスチ（東北伯）内陸部に位置する田舎町ペトロリーナでも、今やビックマックにかじりつくことができるのだ。

ところで、狂信的マック愛好者でもない筆者がいきなりマックを取り上げるのはなぜか。エコノミスト誌が中立的経済指標としてビックマック指数をひねり出したように、マックバーガーの価格もさることながら、マックのお店がいつ、どこで始まり、何軒あるかといった情報は、ある国や地域の社会・経済を理解するための客観的データになるからである。

そのマックのお店がブラジルで最初にオープンしたのは、サンパウロのパウリスタ大通りで1981年のこと、と筆者は長い間信じていた。ところが、第一号店はサンパウロではなくてリオのコパカバーナで、1979年のことであった。この事実を知ったのは、今年3月末に出かけたロサンゼルスの本屋でたまたまみつけた *The Rio de Janeiro Reader – History, Culture, Politics* (Duke University Press 2016) に収録されている、ジョルナル・ド・ブラジル紙の記事『1979年のバーガー戦争』を読んだからだ。マックの競争相手となったブラジル民族資本のバーガーチェーン店は複数あって、なかでも米国人が始めたBob'sは1951年創業で歴史もあり、今後のバーガー戦争の展開が面白そう、と皮肉っぽい文体ながら読ませる記事になっている。紋切り型の理解ではあるが、首都であったリオの先進性は音楽（サンバであれボサノヴァであれ）や映画といった文化面はもちろん、政治や経済の面でも抜きん出ていることは確かであり、ハンバーガーもその一例ということになる。

ここで、この英文版のリオ史料案内書をもう少しみてみよう。収録史料をざっとみると、古典的民族誌ともいえるジャン・ド・レリー（1534～1613）『ブラジル旅行記』の抄訳、ヴァロンゴ奴隷市場の記述、カンドンブレに関する最初の記録、19世紀後半の性風俗、新聞広告抄訳、20世紀初頭のアナキスト逮捕記事、シュテファン・ツヴァイクのブラジル紀行、1960年代末の学生プロテスト運動、ショッピングセンター時代の幕開け、ブラジル版黒人意識運動、保健省によるエイズ防止（コンドーム使用促進）キャンペーン、等々。筆者の関心領域からいえば、1950年の第4回ワールドカップにおける「マラカナンの悲劇」についての記事や、1955年のネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督のデビュー映画『リオ、40度』の上映禁止反対運動に関する史料のほうが面白かったのだが。

さて、昨今の政治経済の大混迷、とりわけペトロブラス疑惑に象徴される労働者党政権の腐敗と政治執行能力の完全欠如というすさまじさ、これらすべてに対する国民の怒りに基づく大統領弾劾手続きをめぐるドタバタ（下院本会議で可決された弾劾継続を、議長代行が無効宣言するといった茶番など）を詳細にフォローしてドギマギするよりも、こうした史料を読み込んだほうが、リオの“真の実力”を理解することに直結すると考えるのだが、いかがだろうか。

最後にまたマックに戻ると、2014年のワールドカップのときは、期間限定で曜日ごとの日替わりメニュー（日マック・ブラジル、月マック・スペイン、火マック・ドイツなど）を展開し、サッカー祭典を盛り上げたのだったが、今回はマック・オリンピックのような企画はないようだ。

ここは、リオ・オリンピック・パラリンピックの成功をただ祈り、絶対うまくいくと信じるのみである。